



Title	社会階層と自己認識：男女の比較を中心に
Author(s)	木村, 好美
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 115-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会階層と自己認識

——男女の比較を中心に——

〈要旨〉

高度経済成長以降、日本は物質的に豊かになり、人々の生活水準においても際立った差異が認められなくなった。日本国民の中意識の増大にも、このことが少なからず反映されているであろう。

物質的に豊かな社会を達成した現在、人々は物質面だけでなく、精神面でも充足感を求めるようになった。自らの人生や生き方について深く考えるようになった。このような中で、「自己実現」という言葉が注目を集めるようになっていく。

では、この「自己実現」と社会階層的要因は、どのようにかわりあっているのだろうか。

先行研究により、社会階層と自己認識との関連は見出されにくいことが指摘されている。「自己実現」の有無は本人の自己認識によって決まるため、「自己実現」は自己認識の一つだと考えられる。「自己実現」も、自己認識に関する先行研究と同様、社会階層との関連は見出されないのだろうか。

これらを明らかにするために、一九九五年SSM調査データを用い、自

己実現に対してパス解析を行った。

その結果、次の三点が明らかになった。

(1) 社会階層要因は、女性でのみ自己実現の規定因として有意な効果を持つ。

(2) 男性と女性では、自己実現の規定因が異なる。男性は、年齢、積極性が、女性は年齢、積極性、収入、交際が有意な直接効果をもつ。

(3) 男性は自己実現に対して社会階層要因の影響は小さいが、交際・積極性に関しては女性よりも社会階層要因の影響を強く受ける。

キーワード

社会階層

自己認識

自己実現

交際

積極性

木村 好美

1. 問題

高度経済成長を経て物質的に豊かになった今日、人々はアイデンティティを追求し、自らの人生や生き方について考えるようになってきた。このような中で、人々は「自己実現」を求めるようになってきている。

では、このような「自己実現」と社会階層的要因とはどのようなにかかわりあっているのだろうか。高度成長期を経て、物質的に豊かになった現在、収入や学歴、職業威信などの社会階層的要因は、人々の「自己実現」に対して何の効果も持たないのであるか。それとも、「自己実現」に至る諸条件の一つとして、社会階層的要因は強い効果を持つのだろうか。

「自己実現」しているかしていないかは、本人でないと分からない。つまり、「自己実現」の有無は、本人が「自分は自己実現している」と認識するか否かで決定するのである。そのため、「自己実現」は自己認識の一つであると考えることができる。

これまで社会階層と自己認識との関連については、社会階層と自己信 (Self-Confidence) について^①、社会階層と自己卑下 (Self-Derogation) について^②など様々な研究がなされてきた。社会階層と自己を高めようというアップグレーディングバイアスを有しており、その程度は個人によって異なるため、社会階層と自己認識との関連は

観察されにくいことが述べられており、その他の先行研究においても社会階層と自己認識との関連は見出されにくいことが指摘されている。

これらのことから、社会階層と自己認識は、社会階層と階層帰属意識と同様、客観的な社会状況と本人の主観的認知のズレという問題を含んでおり、そのために関連が見出されにくくなっていると考えられる。

本稿では一九九五年SSM調査データを用い、関連が見出されにくいとされている社会階層と自己認識について分析を行い、両者の関連を明らかにすることを目指す。すなわち、社会階層との関連に注目し、自己実現の規定因を明らかにする。特に、性別により「自己実現」の規定因に差異がみられるのかを確認したい。

2. データ

分析には一九九五年SSM調査データ^③のB票を用いる。この調査は、一九九四年十二月三十一日の時点で満二十歳～六十九歳の男女を対象に、一九九五年十月下旬～十一月下旬にかけて実施された。

表1:1995年 SSM調査 B票

	男性	女性	計
サンプル数	2,016	2,016	4,032
有効回収数	1,242	1,462	2,704
有効回収率(%)	61.9	72.5	67.1

3. 分析に用いた変数

3. 1. 自己実現

「自己実現」という言葉の定義には、実に様々なものがある。そのどれをとっても、非常に曖昧な表現が多いのだが、すべてマズローの「欲求階層理論」を踏まえているという点では一致する。

マズローは、人間の欲求を生理的欲求、安全の欲求、所属と愛情の欲求、自尊の欲求、自己実現の欲求という五つの階層に分かれたものと捉え、生理的欲求を一番下位、自己実現の欲求を最も上位の欲求とした。そして、人は下位の欲求が満たされると、より上位の欲求へと向かうのだ、と説いた。^③

このマズローの理論を踏まえ、「自己実現」は、「人が自己の能力を最大限に発達させ、それを活用しようとする過程」^⑤「高度に自律的な人間像」^①『よく生きる』という価値を中心に据えること^⑧などと定義、説明されている。

このように「自己実現」という概念は、抽象度の高さ故に膨大な下位概念をもつと考えられるが、本稿では、「自己実現している人」の特徴の一つに挙げられている「自己受容」^⑨と、イングルハートがマズローの説に触れ、「脱物質主義」^⑩の指標として「個人の自律性」

「自己実現」を挙げていることに注目した。
すなわち、自己実現の変数として、「日頃の生活で、私は自分なりによくがんばっていると思う」「自分には多くのよい点がある」と

表2：自己実現についての主成分分析

質問項目（よくあてはまる～まったくあてはまらない）	第1主成分	第2主成分	第3主成分
日頃の生活で自分なりによくがんばっていると思う	0.631	-0.093	-0.770
物質的な豊かさよりも、心の豊かさにおききたい	0.568	-0.620	0.541
自分には多くの良い点があると思う	0.527	0.779	0.339
固有値	1.497	0.835	0.668
寄与率	0.499	0.278	0.223
累積寄与率	0.499	0.777	1.000

思う」という「自己受容」と関係の深い二項目と、「これからは、物質的な豊かさよりも、心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたいと思う」と「脱物質主義」の項目を主成分分析して得られた、第一主成分の主成分スコアを用いる。
主成分分析の結果は、表2のとおりである。

3. 2. 社会階層

社会階層との関連を探るため、社会階層の指標として学歴・職業威信・収入を用いる。学歴には教育年数を、職業威信には現職の威信スコア^⑪を、収入には世帯収入を用いた。

ただし、女性に関しては無職やパート労働者が多いので、直井道子の分類を参照し、独自の職業威信変数を作成した。すなわち、フルタイム労働者は自分自身の職業威信スコアを、パート労働者は自分自身の職業威信スコアと配偶者の職業威信スコアの平均値を、自営業主・家族従業者・内職および無職の者が配偶者が在る場合には、配偶者

表3：就業内訳

	男性	女性	計
経営者・役員	100	35	135
一般従業者	741	313	1,054
臨時雇用	30	271	301
派遣社員	2	5	7
自営業主	191	73	264
家族従業者	25	170	195
内職	0	26	26
学生	24	15	39
無職	129	554	683

の職業威信スコアを用いた。

3. 3. 年齢

我々の生活場面において、歳を重ねることにより「（人格が）丸くなる」ということがしばしば言われる。具体的には、加齢によ

り人生に対する諦観のようなものが湧き、それにより要求水準の引き下げが起こり「自己実現」していると思うようになる、ということや、年離れた段階で「自己否定」をするということは、それまでの自分を否定することにもつながりかねないので、自己を肯定的に評価したくなる、という仮説をたてた。

3. 4. 交際

様々な人と付き合うことにより、多くの刺激や知識を得たり、新しい世界が開けたりということは誰しも経験のあることだろう。また、自分より階層の高い人と付き合うことにより、ある種の満足感や達成感を感じ、自己実現へと至るかもしれない。何よりも、他者の存在の無い、自己完結的な自己実現は考えられないだろう。

本稿では調査項目の制約から、回答者が友人・親戚としてつきあいのある職種の数を用いた。職種としては、「地方議員・国会議員」

表4：変数の概要

年齢	回答者の満年齢
学歴	回答者の最終学歴の年数
職業威信	回答者の現職の職業威信スコア（女性は別）
収入	年間世帯収入
交際費	回答者が友人・親戚としてつきあいのある職種の数
積極性	3.5. より
自己実現	3.1. より

「県や市町村に勤めている部課長以上の役人」「会社の社長や役員」「一般のサラリーマンやOL」「医師・弁護士などの専門職の人」「小売り店主、飲食店主」「工場労働者、運転手、土木・建設作業員」「農業や漁業をしている人」「同業組合や労働組合の役員」の九つが挙げられている。

3. 5. 積極性

「自己実現」・「生きがい」の一つに、しばしばボランティア活動や社会参加活動が挙げられている^⑬。このように活動的であること、主体的に意図を持って活動することは、自己実現と関連の深いものであると考えられる。

本稿では、「ボランティア活動、町内会活動など社会活動で力を発揮すること」「趣味やレジャーなどのサークルで中心的役割を担うこと」という、社会活動に関する二項目への意識の高さを「積極性」変数として用いる。分析には、これら社会活動に関する二項目の平均を用いた。回答は、重要である～重要ではないまでの四段階である。

変数の概要は、表4のとおりである。

4. 分析

4. 1. 平均の比較

分析に用いる変数そのものには、男女間で違いが見られるのだから。

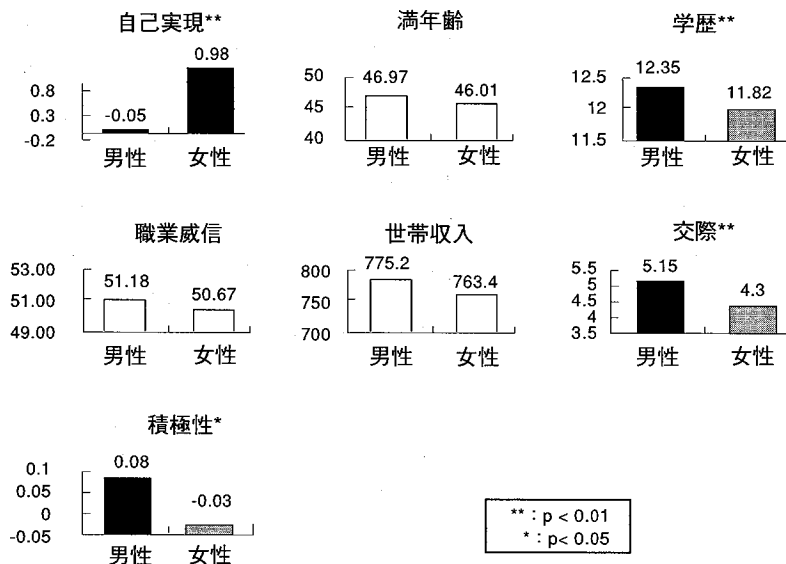


図1 平均の差の検定

うか。これを確認するため、平均の差の検定を行おう。分析結果は図1のとおりである。

学歴・交際・積極性・自己実現で有意な差が見られる。

学歴に関しては、昔の女性は高等教育機関に進むものが少なかったこと、近年の女性に関しては、短大に進学する者が多いことから、男性の平均値の方が高い。

交際については、女性は無職の者が多く、これらの人は本人が積極的に活動しない限り、地域や家庭に限定した交際形態をとりがちになることや、今回分析に用いた調査票においては専業主婦同士の交際における交際職種数はゼロとなることから、女性の平均値が低くなる理由として挙げられるだろう。

積極性は、女性よりも男性の平均値が高くなっているが、これも交際と同様に、職業の有無という要因が作用しているのかもしれない。つまり、男性は日々の職業活動を通じて積極的であることを要請されており、このことが「積極性」の高さに結びついているということが考えられるのである。

積極性では男性の平均値が高いのに比して、自己実現は女性の平均値が男性のそれよりも高くなっている。無職者の多い女性は、男性ほど熾烈な競争に晒されていないため、他者から評価されたり、他者と比較して自己を評価するという場面に遭遇することが少なく、それゆえ自己に対する評価が甘くなるのだろうか。この点については単なる平均値だけではなく、以下の分析結果を参照し、解釈していかねばならないだろう。

表5：相関行列（男性）

	年齢	学歴	職業威信	収入	交際	積極性	自己実現
年齢	1.000						
学歴	-.329**	1.000					
職業威信	-.017	.433**	1.000				
収入	.167**	.236**	.375**	1.000			
交際	.188**	.086*	.056	.282**	1.000		
積極性	.066	.036	.043	.148**	.236**	1.000	
自己実現	.261**	-.055	.045	.080*	.140**	.254**	1.000

**は1%水準で有意、*は5%水準で有意。N=866。

まず、男性の方から見ていこう。自己実現との間に有意な相関が見られたのは、年齢・世帯収入・交際・積極性である。なかでも、年齢と積極性という変数との相関は〇・二六一、〇・二五四と非常に高い。社会階層の変数である世帯収入は〇・〇八〇と、有意な相関のある四変数のうち最も低い数値である。女性の方は、男性の方で自己実現と有意な相関の見たれた年齢・世帯収入・交際・積極性という四変数に加え、学歴年数が自己実現に対し、マイナスで有意な相関を持つ。男性と同様、年齢と積極性という変数が各々〇・二四一、〇・二三七と、自己実現との相関が高い。この次

4. 2. 相関行列
4. 1. では分析に用いる変数について、男女間の違いを見た。ここでは、性別ごとに分析に用いる変数間の関係を確認しよう。上述した変数と自己実現の相関は、表5・6のとおりである。

表6：相関行列（女性）

	年齢	学歴	職業威信	収入	交際	積極性	自己実現
年齢	1.000						
学歴	-.496**	1.000					
職業威信	-.134**	.387**	1.000				
収入	-.004	.230**	.298**	1.000			
交際	-.009	.074*	.047	.158**	1.000		
積極性	.029	.035	.047	.072*	.193**	1.000	
自己実現	.241**	-.104	-.015	.088**	.164**	.237**	1.000

**は1%水準で有意、*は5%水準で有意。N=922。

に交際と社会階層の変数である世帯収入が続く。相関のみを見ると、自己実現に関係する変数——つまり、自己実現と関係する要素——は、男性と女性で異なるように見える。

4. 3. パス解析

前節までの相関関係だけでは、(1) 他の変数を媒介した効果が見られず、(2) 変数のコントロールもなされないため、変数間の因果関係をより正確に把握することが困難である。

そこで、(1) (2) の問題を解決するためにパス解析を行う。これにより、社会階層と自己実現の関係および自己実現にどのようなメカニズムが働いているのかを明らかにする。

4. 3. 1. モデル設定

相関の有無を確認した変数を用い、パス解析のモデルの因果方向を図2のように設定する。図の左に位置する変数は、右側

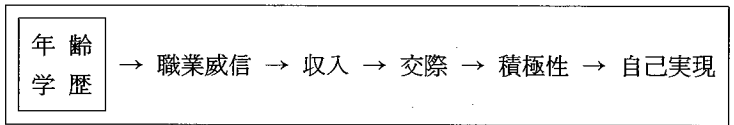


図2：自己実現の因果モデル

に位置する全ての変数の先行要因である。なお、矢印は帰結である。

年齢は誰もが一年に一つずつ重ねていくものであり、学歴も既に獲得されているものである。このため、基礎的・所与の条件として、年齢・学歴を設定する。さらに、そこから獲得されるものとして現在の職業威信と世帯収入を設定し、その後に職業・学歴・収入による影響を受けるであろう交際を置く。

そして、学歴・職業威信・世帯収入などの条件による社会的位置づけがなされた後に、積極性を被説明変数の自己実現の前に置く。

4. 3. 2. 分析結果

パス解析の結果は図3および図4のとおりである。このパス解析の結果を、性別ごとに見ていく。

(1) 男性

男性において、学歴・職業威信・収入という社会階層の変数は、積極性を経由した間接効果しか持たなかった。自己実現の規定因として有意な直接効果を持ったのは、年齢・積極性という二変数である。つまり、年齢、積極性の高い人ほど自己実現をしている、ということがある。

このことから、積極性は自己実現と社会階層を結ぶ重要な変数であることが分かる。そのため、積極性に有意な直接効果を持つ収入・交際が、どのような変数によって規定されているのかを確認しておこう。

収入

収入は年齢・学歴・職業威信から有意な正の直接効果を受けている。年齢・学歴・職業威信が高い人ほど、収入が高いということである。年齢が高いほど収入が高くなるということは、日本特有の「年功序列制度」を示しているといえよう。

交際

交際は、年齢・学歴・職業威信・収入から有意な直接効果を受けている。このうち、職業威信は負の効果であるから、年齢・学歴・収入が高く、職業威信の低い人ほど様々な職種の人とつきあいがあるといえることになる。学歴・職業威信・収入から有意な直接効果を受けていることから、交際は社会階層の影響を強く受ける変数であるといえよう。

年齢の効果としては、年齢を重ねてゆくにつれ、それまでのつきあいが蓄積されていき、多様な職種の人とつきあうようになることが考えられる。

学歴に関しては、同窓生の効果を考慮するだけでも、大学を卒業した人は小・中・高・大学時代の同窓生を持ち、大学に進学しな

った人よりも多くの人と知り合いになることが考えられる。また、低学歴の人は、学歴が低いことが参入障壁となる職業の人と知り合いになりづらいのに対し、高学歴の人はそのようなことが無いため、学歴が高いほどつきあう人の職種が多様になると思われる。

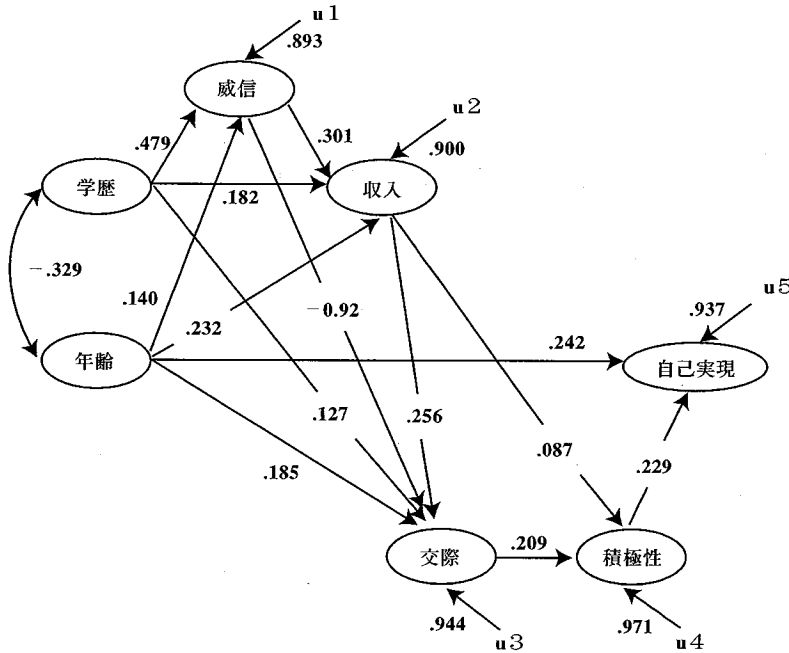


図3 パス解析 (男性)

* 10 %水準で有意なパスのみを表示してある。N = 866。

収入の効果は、付き合いには経済的な負担が伴う、ということの表われでもあろう。

職業威信の負の効果に関しては、人口をコントロールしていないためにこのような負の効果が見られることが考えられる。

本稿で分析に用いた、一九九五年SSM調査データB票によると、人口の少ない地域に居住している人ほど「地方議員・国会議員」「県や市町村に勤めている部課長以上の役人」「工場労働者、運転手、土木・建設作業員」「農業や漁業をしている人」「同業組合や労働組合の役員」を「付き合いのある人」として挙げる人が多くなる。都市部では、そもそも第一次産業従事者が少ないので、農業・漁業労働者と接する機会にあまり恵まれないこと、人口が少ない地域では、人口が少ない故に互いが知合いになる可能性が高く、その結果様々な職種の人と付き合い合うようになるということが、これら付き合いのある職種数の差異として考えられるだろう。

付き合いのある職種数は人口の少ない地域の方が多いのに対し、職業威信の高い者は都市部の方が多いため、このような職業威信の負の効果が見られると言えるだろう。

(2) 女性

女性は年齢・収入・交際・積極性という四変数が自己実現の規定因として有意な直接効果を持ち、男性の分析結果に収入と交際が加わった形になる。すなわち、年齢、収入、積極性が高く、つきあいのある職種数が多い人ほど自己実現をしているということになる。

注目すべき点は、男性で有意な直接効果を持たなかった社会階層要因が、女性では有意な直接効果があるということである。ここで、自己実現に対し、有意な直接効果をもつ変数の規定因を確認しておこう。

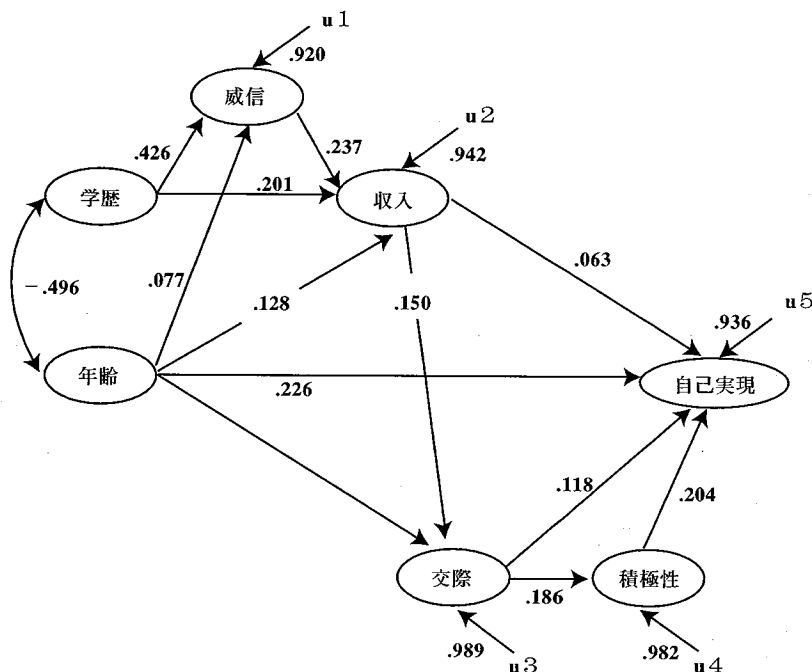


図4 パス解析 (女性)

* 10 %水準で有意なパスのみを表示してある。N = 922。

収入は、男性と同様年齢・学歴・職業威信から有意な正の直接効果を受けているが、交際・積極性を規定する変数は男性と大きく異なる。交際は、収入から有意な直接効果を受けるのみであり、積極性に対しては交際という二変数が有意な直接効果を持つのみである。しかも、交際は残差が大きく、収入以外の影響を強く受けているため、交際に対する社会階層要因の影響は極めて小さい。社会階層要因に強く規定されていた男性の交際とは、大きな違いである。

(3) 男性と女性の差異

以上の分析結果を踏まえ、男性と女性の差異を詳細に検討してみよう。

年齢と学歴が職業威信に効果を持ち、収入に対して年齢・学歴・職業威信が効果を持つ、という社会階層を示す変数の構造は、男女ともに同じであるが、交際と積極性、自己実現の規定因は、男性と女性で大きく異なる。交際から順に、男女の違いを見ていこう。

交際

交際に対して収入が有意な効果を持つ点は、男女ともに同じである。これは、付き合いには何らかの形で経済的な負担が伴うということの表われであろう。交際と経済状況の関係は、それほどまでに深いのである。

しかし、収入の効果が男女共通であったのに対し、男性で交際に有意な効果を持った年齢・学歴・職業威信が、女性では有意ではな

い。これは、男性の交際の幅は社会階層要因に強く規定されるが、女性の方は必ずしもそうではないことを意味する。社会階層要因以外に、年齢も女性では有意な効果を持たないことから、女性の交際の幅は社会階層や年齢などの属性的な部分ではなく、個人の志向や価値観に規定されているということや、属性の影響がもっと複雑な表出の仕方をしていることが考えられる。

積極性

積極性の規定因に関して、交際が有意な効果を持つという点は男女ともに同じである。つまり、様々な職種の人とつきあっている人は積極性が高まるということは、男性にも女性にも共通しているのである。積極性の規定因として交際が効果を持つ理由としては、様々な職種の人と出会うことによって多くの刺激を得ることができ、視野も広がるということが挙げられるだろう。女性の方で積極性に対して有意な効果を持つ変数は交際のみだが、男性は交際に加え、収入も有意な効果を持つ。

積極性のみならず交際に対しても、女性は社会階層要因の影響をあまり強く受けない。収入という変数が交際に対して有意な効果を持つものの、残差が大きいために収入以外の効果が大きいと判断されるからである。しかし、男性は積極性に対しても交際に対しても社会階層要因から強い効果を受けており、社会階層要因が志向をも規定していることが分かる。^⑬

自己実現

年齢・積極性は、自己実現の規定因として男女問わずに有意な効果を持つ。

年齢に関しては、加齢による効果と時代効果という二つの効果が考えられる。加齢による効果としては、要求水準の引き下げや、今までの自分を否定したくないという気持ちが強くなり作用し、自己実現に至るといふことなどが考えられる。もう一点の時代効果としては、終戦直後の混乱や高度経済成長、オイルショックなど様々な経験を経た今の中高年世代に特有の志向・価値観の反映として、年齢が自己実現に対して効果を持つことが挙げられるだろう。

積極性が自己実現の規定因として性別を問わず有意な効果を持つことは、活動的であること、主体的に意図を持って活動することは、人を自己実現へと導くことを示している。同時に、ボランティア活動や社会参加活動の意義として「自己実現」を挙げることの妥当性をも示しているといえる。

自己実現に対し有意な効果を持つ変数は、男性は前述した年齢と積極性のみであるが、女性は年齢と積極性に加え、収入と交際が有意な直接効果を持つ。つまり、女性は年齢、積極性、収入が高く、つきあっている人の職種が多様であるほど自己実現が高まる、ということである。収入が有意であることから、男性で有意な直接効果を持たなかった社会階層要因が、女性では効果を持つことが分かる。

本分析では、収入という変数に世帯収入を用いている。そのため、本分析における収入の増減は、必ずしも女性の労働のみに起因する

ものではない。3. 2. より、女性はパート労働者や無職者が多いことを鑑みると、配偶者が在る場合は、配偶者——つまり、夫——の収入の影響が大きいことが考えられる。すなわち、女性は年齢や積極性といった自分自身の要因だけでなく、「自分がいくら稼いだか」「自分がどんな職業についているか」ではなく、他者が関与する「世帯収入」「つきあいのある人の職業数」という変数が自己実現に対して有意な効果を持つのだ。女性は、「虎の威を借る狐」的要素を持っているといえる。

5. 結論

分析結果から得られた知見は、以下の三点である。

- (1) 社会階層要因は、女性でのみ自己実現の規定因として有意な効果を持つ。
- (2) 男性と女性では、自己実現の規定因が異なる。男性は年齢・積極性という二変数が、女性は年齢・収入・交際・積極性という四変数が自己実現の規定因として有意な直接効果を持つ。
- (3) 交際・積極性という変数に対しては、女性よりも男性の方が社会階層要因の効果が大きい。つまり、男性は自己実現に対して社会階層要因の影響は小さいが、交際・積極性に関しては女性よりも社会階層要因の影響を強く受ける。

本稿の課題であった自己実現と社会階層の関連は、女性において

は確認された。しかし、自己実現に対して有意な効果を持つのは収入のみであること、収入よりも年齢・交際・積極性の効果の方が強いことから、自己実現に対する社会階層の影響は、強いとはいえない。男性の自己実現の規定因として社会階層要因が有意な効果を持たないことも考え合わせると、自己実現に対する社会階層の効果は弱いものだと言わざるを得ないだろう。このことは、高学歴や高収入の獲得、地位達成といった従来の「立身出世」的価値観は、自己実現に直接結びつかないということを意味している。

「立身出世」的価値観が自己実現に対して効果を持つということは、自己実現を達成するための手段が明確であることを意味する。高学歴を獲得すればよい、高威信の職業に就けばよい、お金を稼げばよい：自分で達成手段を決めなくて良い分、何をどうすれば良いのか迷わなくて済む分、ある意味では楽である。

しかし、自己実現に対しては、そうはいかない。自己実現に至るには、高学歴や高収入の獲得、地位達成ではなく、もっと別の要素が必要なのだ。女性に比べ男性の自己実現の平均値が低いのは、男性の迷いの深さを象徴しているのかもしれない。

本稿においては、社会階層と自己実現の関係を明らかにすることを目としたため、社会階層以外の自己実現に対する規定因については殆ど触れていない。また、男性は有職者だけを分析対象としているが、女性は無職者も分析に加えているため、職業が女性に及ぼす影響を捉えきれない。

今後は、社会階層以外でどのような要因が人を自己実現へと至ら

しめるのか、それらの要因と社会階層の関係はどのようになってい
るのかということや、女性の自己実現の規定因は就業の有無や就業
形態により異なるのかということを明らかにする必要があるだろ
う。

※本研究の分析を行うにあたって、一九九五年SSM調査委員会の
許可をいただきました。

註

- (1) Kohn, Melvin L., and Carmi Schooler. 1983. *Work and Personal-
ity: An Inquiry Into the Impact of Social Stratification*. Norwood:
Ablex Publishing Corporation.
- (2) Kaplan, Howard B. 1971. "Social Class and Self-Derogation: A
Conditional Relationship." *Sociometry* Vol.34: 41-64.
- (3) SSM調査とは、「社会階層と社会移動全国調査 (Social Strati-
fication and Social Mobility Survey)」の調査である。この調査は
一九五五年から十年ごとに実施されており、一九九五年は第五回
目にあたる。
- (4) 例えば、小川 一夫 一九八七、堀 洋道他 一九九七、安藤
清志他 一九九五、古畑 和孝編 一九九四 を参照。
- (5) Maslow, Abraham H. 1954. *Motivation and Personality*. New-
York: Harper.
- (6) 古畑 和孝編、一九九四 『社会心理学小辞典』有斐閣
- (7) 安藤 清志・大坊 郁夫・池田 謙一、一九九五 『社会心理学』
岩波書店
- (8) 安藤 清志・大坊 郁夫・池田 謙一、前掲書

(9) 古畑 和孝編、前掲書

(10) Inglehart, R., 1977 *The silent revolution : Changing values & po-
litical styles among Western politics*. Princeton University Press.
(一九八三・三宅 一郎・金丸輝男・富沢克訳 『静かなる革命』
東洋経済新報社)

(11) 職業威信スコアは、一九九五年版のSSM職業威信スコアを用い
た。

(12) 直井 道子、一九九〇 「階層意識——女性の地位借用モデルは有
効か——」『現代日本の階層構造4巻 女性と社会階層』東京大
学出版会

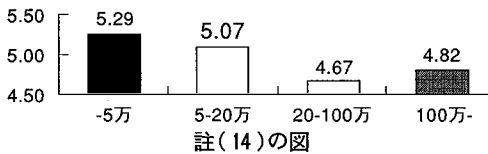
(13) 例えば、稲月 正 一九九四、野呂 芳明 一九九六 を参照。

(14) 人口別の交際職種数は、左の上の図のとおりである。

(15) 人口別の職業威信は、左の下の図のとおりである。

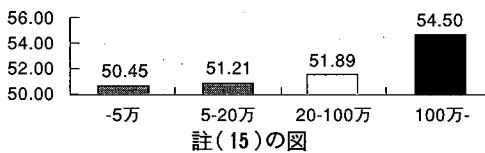
人口別交際職種数

(F値：3.21、5%有意)



人口別職業威信

(F値：9.06、1%有意)



(16) しかし、男女ともに積極性は残差が大きいことに注意しておかねばならない。

参考文献

- 鮎戸 弘・松田義幸編、一九八九『ゆとり』時代のライフスタイル』日本経済新聞社
- 安藤 清志・大坊 郁夫・池田 謙一、一九九五『社会心理学』岩波書店
- Chudacoff, H.P., 1989 *How Old Are You? : Age Consciousness in American Culture* Princeton University Press (一九九四、工藤政司・藤田 永祐訳『年齢意識の社会学』法政大学出版局)
- 古畑 和孝編、一九九四『社会心理学小辞典』有斐閣
- 堀 洋道・山本 眞理子・吉田 富二雄編、一九九七『新編 社会心理学』福村出版
- 稲月 正、一九九四「ボランティア構造化の要因分析」『季刊社会保障研究 究 Vol.29 No.4』社会保障研究所
- Inglehart, R., 1997 *The silent revolution : Changing values & political styles among Western politics*. Princeton University Press. (一九八三、三宅一郎・金丸輝男・富沢克訳『静かなる革命』東洋経済新報社)
- Kaplan, Howard B. 1971. "Social Class and Self-Derogation: A Conditional Relationship." *Sociometry* Vol.34: 41-64.
- Kohn, Melvin L., and Carmi Schooler. 1983. *Work and Personality: An Inquiry Into the Impact of Social Stratification*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Maslow, Abraham H. 1954. *Motivation and Personality*. New York: Harper.
- 直井 道子、一九九〇「階層意識——女性の地位借用モデルは有効か——」

『現代日本の階層構造4巻 女性と社会階層』 東京大学出版会

野呂 芳明、一九九六「生活文化としての社会参加——「豊かさ」のイメー
ジを求めて——」『高齢化とボランティア社会』 弘文堂

小川 一夫監修、一九八七『社会心理学用語辞典』 北大路書房

富永 健一編、一九七九『日本の階層構造』 東京大学出版会

Do Social Stratification Factors Have Any Effects upon the Sense of Self-Actualization?

— Focusing on the Difference between Men and Women —

Yoshimi KIMURA

Our society has experienced high level of economic growth, and society as a whole has since become a materially affluent one, in which we are now allegedly not so different from one another in our standard of living, and a growing number of youth receive higher education. Under these situations, it becomes important to self-actualize.

Then, what determines our sense of self-actualization? Do such indices of social stratification have any effect, as income, academic career, prestige, etc., on our sense of self-actualization?

In view of these, the paper aims at clarification of some supposed determinant factors of Japanese people's self-actualization. For their elucidation, we will focus, particularly, upon the presupposed differences of these factors between the sexes.

Survey and analysis — of the relation between the sense of self-actualization and social stratification, through path analyses based on the data attained from the Social Stratification and Social Mobility Survey of 1995 — have shown the following.

- 1) Some indices of social stratification made use of in our analyses have been shown to be significant, only for women, as probable factors that determine the sense of self-actualization.
- 2) There has turned out to be a difference between the sexes in the determinants of that sense. Significant as such determinants are, in the case of men, two variables: age and activities, while the equivalents for women are four variables: age, income, the range of social connections and activities.
- 3) With regard to the variables mentioned above, the range of social connections and activities have been found out to be more meaningful for social stratification among men than among women.

Key Words

Social stratification
self-perception
self-actualization
connection
activities